



ズワイガニ日本海系群B海域 研究機関会議結果

1

内容



1. ズワイガニ日本海系群B海域の資源評価結果
2. ズワイガニ日本海系群B海域の管理基準値案、漁獲管理規則案等の提示

本資料における、資源量水準、目標管理基準値（目標水準）、限界管理基準値（限界水準）および漁獲管理規則については、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）における検討材料として、研究機関会議において暫定的に提案されたものである。
これらについては、ステークホルダー会合を経て最終化される

2

分布と生物学的特性



分布

- 秋田県～新潟県沖の陸棚斜面&縁辺部（水深200～500 m）に分布。
- 島、天然礁がある急峻海域で、漁場は分布域に比べごく狭いと考えられる。

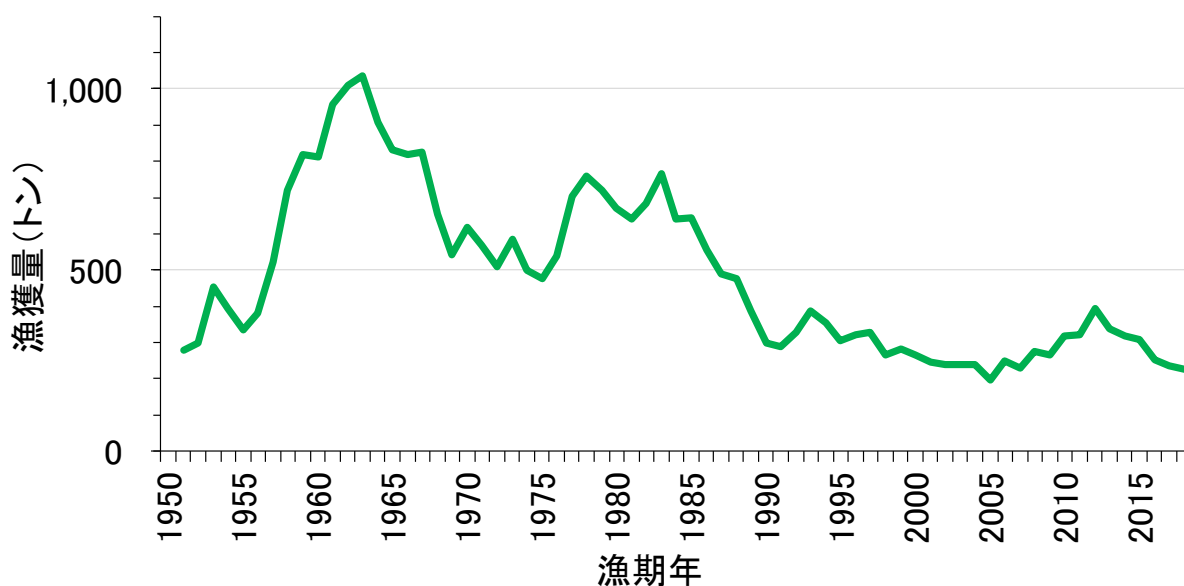
生物学的特性

- 寿命:10歳以上
- 成熟開始年齢：雄は脱皮齢期で11歳以降、11歳（5%）、12歳（20%）、13歳（100%）、雌は11歳（100%）
- 産卵期・産卵場：初産卵は夏～秋、経産卵は2～3月、産卵場は分布水深帯の浅い方にあり、各地に点在。
- 食性：底生生物を主体に甲殻類、魚類、イカ類、多毛類、貝類、棘皮動物など
- 捕食者：小型個体はゲンゲ類、マダラなど

3

漁獲量の推移

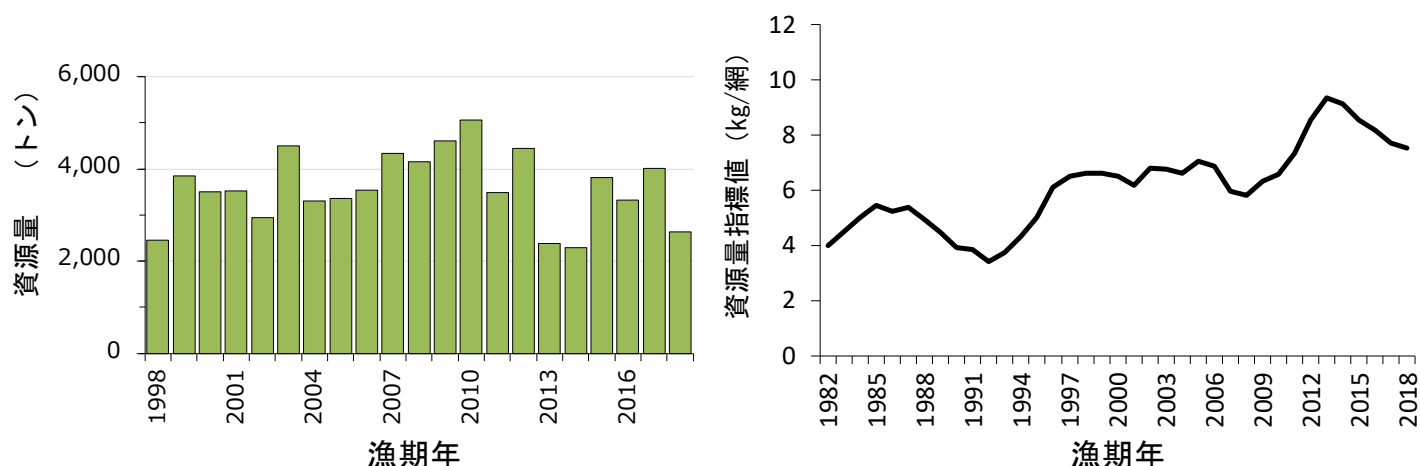
本系群の漁獲量や資源量指標値は漁期年（7月～翌年6月）の数値を示す。



- ・ 漁獲量には、1960年代に約1,000トン、1980年代に約800トンのピークがみられる。
- ・ その後は減少し、1990年代以降は200～400トンで推移している。2018年の漁獲量は227トンであった。

4

資源量および資源量指標値の推移



- かに籠調査に基づく資源量は、1998年以降2,300～5,100トンで推移している。
- 資源量指標値として、最も長期データとなる沖合底びき網および小型底びき網漁業の漁獲成績報告書から求めた雌雄合計の資源密度指数(*)の過去5年平均 (kg/網) の推移を示した。
- 資源密度指数 (kg/網) は、1992年に3.4と最低であったが上昇して2005年には7.1となった。その後やや低下したが、再び上昇して2013年は9.3となった。2014年以降はやや低下しているものの、2018年は7.5で、依然として高い水準であった。

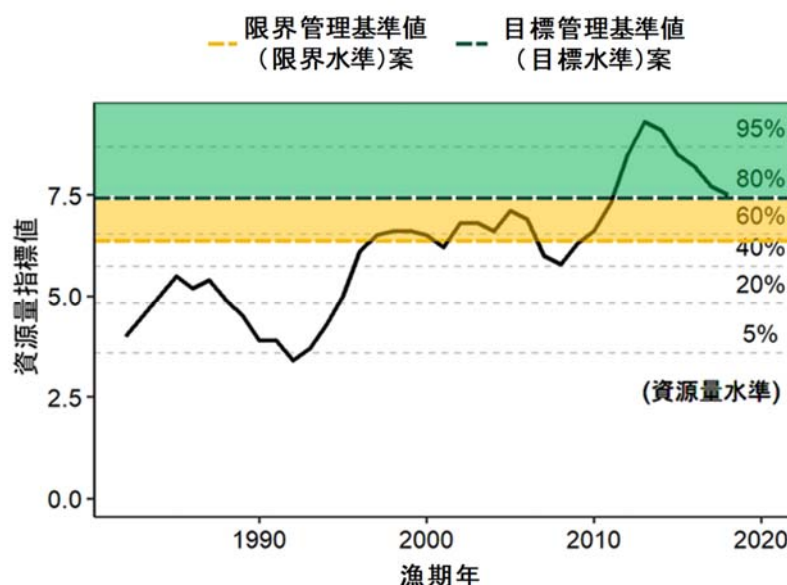
* 資源密度指数：各月各漁区の底びき網によるCPUE (kg/網) の平均値である。

5

2. スワイガニ日本海系群B海域の管理基準値案、漁獲管理規則案等の提示

資源量指標値の推移とそこから判断した資源量水準、管理基準値案

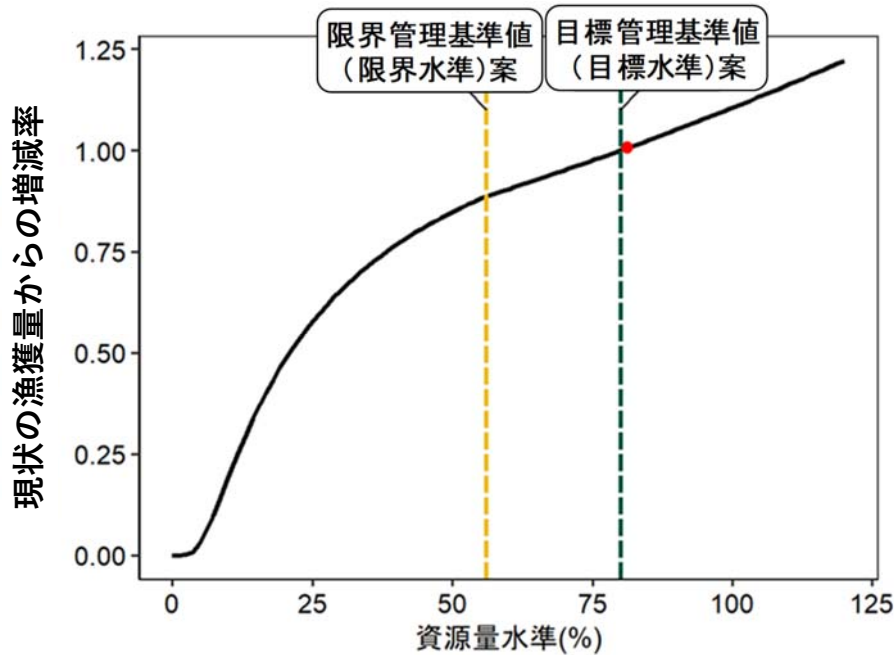
本系群で使用可能なデータは漁獲量と資源量指標値である。したがって、「令和2（2020）年度 漁獲管理規則およびABC算定の基本指針」の2系規則を適用する



- MSYを実現する資源水準の値(の代替値)として、目標管理基準値としては過去の資源量指標値の範囲のうちの80%水準を、限界管理基準値としては56%水準を提案する。
- 2018年の資源量指標値 (7.50) は81.3%水準に相当する。これは目標管理基準値案 (80%水準) を上回る。

6

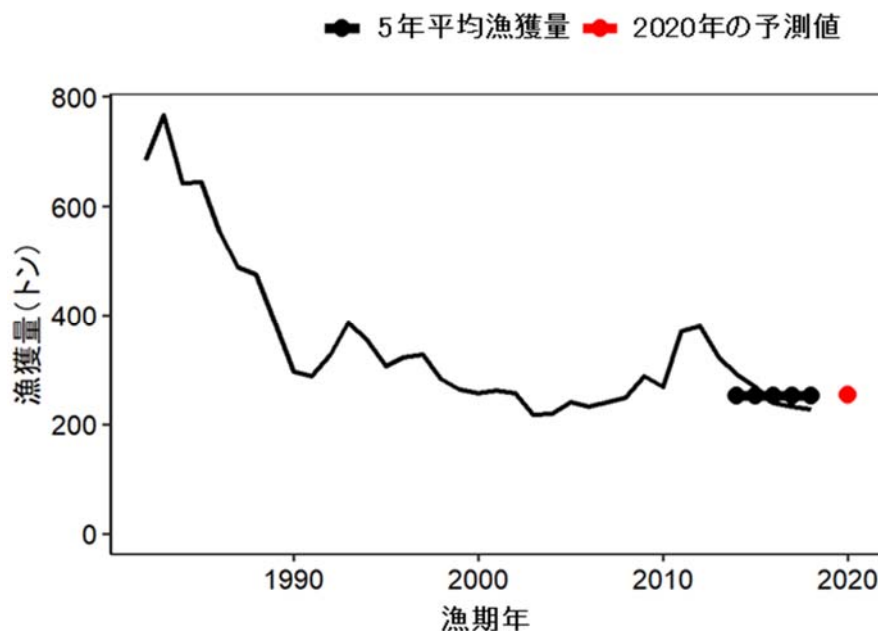
漁獲管理規則案



- 資源量水準が目標管理基準値案を上回れば漁獲量を増加させ、下回れば削減させる規則である。資源量水準に対応した現状の漁獲量からの増減率を規定する。
- 現状（2018年）の資源量水準（81.3%）における漁獲量の増減率は1.01倍である（赤丸）。

7

漁獲量の推移と2020年の予測値



- 直近5年（2014～2018年）の平均漁獲量（252トン）にスライド7の漁獲管理規則案に基づく増減率（1.006）を乗じて予測される2020年の漁獲量は254トンとなる（赤丸）。
- なお、本海域では再生産関係が利用できないことから、資源の将来予測による2021年以降の予測値の計算は不可能である。

8

目標管理基準値（目標水準）案、限界管理基準値（限界水準）案
の資源量指標値と漁獲管理規則案で対応する漁獲量の増減

	資源量指標値 (kg/網)	資源量水準	漁獲量を 増減させる係数
目標管理基準値 (目標水準) 案	7.43	80%	1.0
限界管理基準値 (限界水準) 案	6.36	56%	0.89
現状の値 (2018年)	7.50	81.3%	1.006
※資源量指標値から判断される資源量水準に対応し、次の漁期の漁獲量をどのように増減させるかが漁獲管理規則案により規定される。なお、直近5年平均の漁獲量は252トンであり、2020年の漁獲量は254トンと算定される。			